様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ４ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０２０５

研究課題名（和文）占領期ローカルメディアに見る文学者・出版関係者のネットワーク形成に関する研究

研究課題名（英文）Study on local media of occupation period: networking between literary men , editors and publishers

研究代表者
大原　祐治（Ohara, Yuji）

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：４０５５４１８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：占領期におけるローカルメディアに関して、刊行形態の多様性や刊行を支える人的ネットワークについて調査を進めた。成果としては復刻版『月刊にひがた』（2016年、三人社）を刊行し、別冊解題にて占領期の地方における出版文化に関する現段階での調査成果を踏まえた論述を行った。なお、本研究で蓄積した成果および明確化した今後の課題については、2016年度より採択された科学研究費（基盤研究B　課題番号16H03386）「占領期ローカルメディアに関する資料調査および総合的考察」による共同研究へと引き継がれることとなった。

研究成果の概要（英文）：We investigated local media of occupation period, especially focusing on variety of form of magazines and personal network support publication. As a result,we published a reprint of "Gekkan Niigata(Monthly Niigata)" from San'ninsha.

研究分野：日本文学

キーワード：占領期　地方雑誌　出版文化

１．研究開始当初の背景

近代日本文学に関する研究は従来、個別の作家・作品に関する考察を出発点とするものが多かったが、近年においては旧来の枠組みを相対化する試みも行われ始めた。とりわけ、占領期の日本文学に関する研究は、GHQ による出版物への検閲が文学作品の生成と流通に与えた影響を視野に収めた研究が行われるようになった。データベース化の行われた GHQ 検閲に関する資料（プランゲ文庫）を参照したメディア論的視座に立つ研究は、近年急速に進展しつつある。

一方、1945 年 8 月を切断線として自明視せず、戦中戦後を「1940 年代」としての連続性のもとに捉える視座は近年、文学研究のみならず歴史学など近接する学問領域において共有されてきた。文学研究に関して言えば、戦時下における日本文学報国会地方支部の活動は、人的ネットワークの点で明らかに戦後文学の出発に際して連続性を有している。この連続性を捉える意味で、戦後文学を「地方」から捉え直す視点は重要であると考えられる。

２．研究の目的

戦後における日本文学の諸相を考える上で、その前提となるメディア環境に関する考察は不可欠である。

占領下における GHQ の検閲のありようを如実に伝えるプランゲ文庫資料は、戦後日本文学について考える上で貴重な資料を提供するものだが、戦後のメディア環境すべてを隈なく網羅しているわけではない。充実した資料と、それを見渡すためのデータベースが整備されたからこそ逆に浮上するのは、こうした資料環境から漏れ出る領域の存在である。

検閲制度が十分に周知徹底されなかった占領初期、大都市以外の地方において刊行された各種雑誌類はプランゲ文庫に収められていないものが少なくないが、その存在については十分な調査がなされないまま、各地の図書館に所蔵されるか、古書として流通している状況にある。

こうした地方雑誌については従来、その資料的価値に関する本格的な検討がなされていない。しかし、戦中から敗戦直後にかけて、文学者を含む多くの言論人が地方に疎開し、各地の文化運動等に関与していたことを考えれば、地方雑誌の中に、こうした言論人たちの活動を如実に伝える貴重な資料が含まれることは言うまでもない。

戦後の文学およびメディアについて考察する上で、占領期における地方雑誌は貴重な資料として精緻な調査が期待される領域である。本研究はこうした領域における今後の研究の基盤づくりを試みるものである。

３．研究の方法

（1）地方新聞社を刊行母体とする比較的規模の大きな地方雑誌に関する調査

研究代表者がすでに作業を開始していた雑誌「月刊にひがた」（新潟日報社）に関する調査作業（総目次の作成など）を起点に、各地の地方新聞が戦後に創刊した総合誌や文芸誌について調査を行う。プランゲ文庫データベースを活用して概況を把握した後、各地の公立図書館、資料館や刊行元の新聞社などを対象に所蔵状況の調査を行い、現物を実見しながら総目次を作成する。

続いて、寄稿者のプロフィールを調査し、編集部と寄稿者との間の人的ネットワークのありようをたどる。さらに、特集記事や読者投稿記事の内容を精査し、地域社会と地方における言論人との間で構築される、地方文化に関する議論の諸相を検討する。

（2）地方における各種団体（文化運動団体、労働組合、学校など）を刊行母体とする小規模雑誌に関する研究

全国各地で簇生した地方文化運動団体をはじめ、各職域における労働組合、各種学校などを刊行母体とした小規模地方雑誌のうち、少なからぬ部分は散逸している状況にある。

プランゲ文庫データベースを活用して概況を確認した後、各地の図書館、資料館における所蔵状況を調査するとともに、古書として流通している雑誌を蒐集する作業を継続的に行い、順次総目次の作成に着手する。

続いて、寄稿者のプロフィールを調査し、編集部と寄稿者との間の人的ネットワークのありようをたどるとともに、誌面の編集後記や彙報欄などの調査を通して、出版活動と連動しながら実践された地方文化運動の諸相について調査を行う。

４．研究成果

（1）雑誌「月刊にひがた」（新潟日報社）に関する研究調査

本研究の成果としてまず挙げられるのは、雑誌「月刊にひがた」（新潟日報社）の全容に関する調査を終え、総目次と解題を付した復刻版を刊行するに至ったことである。

新潟市に拠点を置く地方新聞社である新潟日報社が一九四六年一月に創刊したこの総合雑誌は、地方における文化発信のありようを知る上で貴重な資料の一つであるが、従来その全容は明らかになっていなかった。国会図書館をはじめとする図書館において、この雑誌の全号を所蔵する館は存在せず、またプランゲ文庫においてもその全容は把握されていなかった。さらに不運なことに、刊行元であった新潟日報社の社屋が一九五五年に起きた新潟大火によって焼失してしまったため、関係資料は新潟日報社内にも残存していなかったのである。

しかし、研究代表者による調査の結果、新潟市歴史博物館の情報ライブラリーに多くの号が所蔵されていることが明らかとなり

（個人の蔵書が寄贈されたものと思われるが詳細は不明）、さらに欠号・欠頁部分について新潟県立図書館および国立国会図書館の所蔵本を参照した結果、その全容がようやく明らかとなった。

版元の新潟日報社は、1887 年創刊の「新潟新聞」を源流とし、戦時下における新聞統合（一県一紙化）によって、「新潟日日新聞」、「新潟県中央新聞」、「上越新聞」の三紙が統合されて 1942 年に誕生したが、その初代社長を務めていたのは、作家・坂口安吾の長兄にあたる坂口献吉である。

『坂口安吾全集』第 16 巻（2000・4、筑摩書房）に収められている書簡によれば、敗戦直後の 1945 年 9 月、献吉と安吾との間では、今後のメディアのあり方をめぐって、活発な意見交換がなされていた。「月刊にひがた」は、このやりとりの中で安吾が献吉に向かって行った提言を受けるようにして創刊された雑誌であった。

創刊号の編集後記によれば、この雑誌の目指すところは「政治に経済に社会問題に活発な言論を展開し、併せて文芸、娯楽等を収めて県民生活のよき伴侶」となるような「新潟県下最高の文化標準」を実現することにあった。

そのため、編集部は地元文化人による座談会等の企画を繰り返し掲載するとともに、多くの著名作家から寄せられた文章をも掲載していた。こうした編集のあり方は、地方新聞社が刊行する雑誌として、必ずしも突出した特徴とは言えない。ただし、「月刊にひがた」の場合に特徴的なのは、先に参照した創刊号の編集後記内に、「創刊号で久米正雄氏の率いる鎌倉文庫と連絡がついたことは大きな収穫であつた、高見順氏の長篇小説、石塚友二氏の随筆を収め得たのはこのためであつたが」云々といった記述が見受けられたことである。本研究では、この記述を出発点に、鎌倉と新潟という遠く離れた二つの土地が、具体的にどのような人的ネットワークによってつながれたのか、ということをめぐって調査を行った。

「月刊にひがた」で最初の連載小説を担当した高見順の日記や、戦時下の東京で刊行されていた文芸同人誌などを調査した結果浮かび上がったのは、戦前・戦中期の東京で文芸同人誌の活動にコミットしていた文学青年たちが、戦争を経た後、自分自身あるいは配偶者等の出身地である地方へと移動し、その移動先のメディア環境に深く関与していくという事例の存在である。

地方メディアの仕事に従事する彼らは、かつての人脈を駆使して東京およびその近郊の言論人に接触し、原稿を依頼することによって、誌面を充実させていく。さらには、原稿依頼に留まらず、講演旅行なども企画されており、戦前・戦中の東京で構築されていた人脈が積極的に活用されている。

さらに加えて興味深いのは、「月刊にひがた」の場合、東京およびその近郊のみならず、さらに遠く離れた九州の文壇との積極的な交流が窺われることである。劉寒吉、矢野朗、原田種夫など、雑誌「九州文学」に集った九州文壇の担い手が、繰り返し「月刊にひがた」の誌面に登場することになったのは、両誌をつなぐ役割を担った、九州出身の新潟日報社員の存在である。

戦時下の疎開という形でなされた移動によって、遠く離れた二つの地方都市をつなぐ回路が形成されたことになるが、こうした事例はおそらく、様々な地方雑誌の中に存在するはずである。地方雑誌について調査研究を行うことは、単に個別の地方についての考察を行うことにとどまらず、いわば地方と地方とをつなぐ回路について考察することにつながるはずだという認識を得た点でも、今後の研究に関する足がかりとなった。

また、「月刊にひがた」に関する調査を通じて明らかになったのは、検閲主体である GH と出版メディアとの間で展開される駆け引きともいうべき位相である。

「月刊にひがた」では創刊号の段階から、新潟に進駐してきた連合軍士官の寄稿した文章が掲載され、また GHQ の占領方針に対して忠実に応えるようにして「婦人参政権を語る座談会」のような企画が恒常的に行われている（そのこともあってか、この雑誌に関しては検閲による削除指示の履歴は存在しない）。

「月刊にひがた」に関しては、新興ローカル紙の一つであったサンデー新潟社（発行人・櫻田正良）とともに、GHQ から用紙の提供を受けていたとする証言もある（戸川吉隆「「サンデー新潟」の発行について」、「けやき」創刊号、1948・12）。

地方都市の代表的なメディアである地方新聞社と GHQ との間でどの程度密なコミュニケーションが確立していたのかということについては、今後さまざまな地方都市のケースについて考察を行うことが必要であろう。本研究では、今後 GHQ と地方メディアの関係について考えるための基本的な見取り図を得ることができた。

（2）その他の地方雑誌に関する研究調査

現段階では各地の図書館・資料館における所蔵状況を確認するとともに、古書として流通する地方雑誌を蒐集する作業を継続している段階であり、未だまとまった成果を得るには至っていない。

とはいえ、現在までの資料蒐集および研究調査の作業結果を踏まえ、いくつかの方向性が可視化された。

まず、地方雑誌の刊行が特に盛んであったと思われる都市、地域（仙台、金沢、名古屋、岐阜、福岡など）が存在するという事実である。考察のための視座としては次のようなものが挙げられる。

①印刷設備や用紙などの多寡

②執筆者としての疎開文化人の有無
③戦時下における地方文化運動のとの連続性の有無

以上のような視点に基づいた研究を実践するためには、かなりの分量におよぶ調査を広範に行うことが必要となる。そこで、研究代表者はこの研究課題をより大きな研究組織へと拡大し、共同研究として発展させることを企図し、本研究課題の最終年度を待たずに一年前倒しで次の研究課題として応募した結果、2017 年度からの採択にこぎつけることができた。

新たな研究課題（基盤研究 B：占領期ローカルメディアに関する資料調査および総合的考察、16H03386、2016～2020 年度）では、検閲に関する問題、引き揚げ者に関する問題、セクシュアリティ表象に関する問題、といった様々な研究課題に関する専門家とともに、本研究課題の内容を発展的に受け継いでいく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）
①大原祐治、「月刊にひがた」研究、新潟日報、査読無、pp.28、2016 年 2 月 13 日

②大原祐治、地図と痕跡―大岡昇平『武蔵野夫人』論、人文研究（千葉大学）、査読無、44 号、pp.143-168 、2015 年 3 月

③大原祐治、〈戦後〉の始め方―太宰治「パンドラの匣」論―、近代文学合同研究会論集、査読無、第 10 号、pp.96-111、 2013 年 12 月

④大原祐治、書くことの倫理―大岡昇平『俘虜記』論序説、語文論叢、査読無、28 号、pp.1-11、 2013 年 7 月

〔学会発表〕（計 1 件）
①大原祐治、占領期におけるローカル・メディアのかたち―雑誌「月刊にひがた」の場合、国際日本文化研究センター共同研究「戦後日本文化再考」2015 年度第 3 回研究会、2015 年 9 月 20 日

〔図書〕（計 1 件）
①大原祐治、『月刊にひがた』復刻版別冊「解題・総目次・執筆者索引」、72 頁、三人社、2016 年 10 月

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大原　祐治（OHARA,Yuji）
千葉大学大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：40554184

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし